

コア・カリキュラム運動にみられる 戦後初期の学校図書館

東京大学大学院教育学研究科
博士課程

今井福司

発表の構成

- (1) 研究の前提
- (2) コア・カリキュラム運動の概要
- (3) 各プランの教材センターへのつながり
- (4) 考察・今後の課題

発表の構成

(1) 研究の前提

(2) コア・カリキュラム運動の概要

(3) 各プランの教材センターへのつながり

(4) 考察・今後の課題

1. 研究の前提

- ・ 研究の目的と本研究の位置づけ
 - ・ 研究の動機
- ・ 背景
 - ・ 戦後初期の学校教育運動
- ・ 調査方法
 - ・ 調査方法
 - ・ 時代範囲

対象となる学校図書館の役割

- 学校図書館の役割とは？
 - 現在は「情報センター」など様々な役割が提唱されている。
- 戦後初期の学校図書館の役割
 - 多様な資料を備え集中管理する「教材センター」
 - 読書推進, 読書材の提供を行う「読書センター」
 - 以上の2つの役割があったと思われる。

研究の動機

- 「教材センター」は戦後初期に確立できたのか
 - 学習指導要領(試案)は、多様な教材を要求した。
 - 第一次米国教育使節団報告書「図書館や教育上必要となる補助教材を備えている学校」の不在を指摘、教材を備えた施設の必要性を主張。
 - しかし、戦後初期に「教材センター」としての学校図書館は確立できたのか(資料センター論との繋がり)
 - よって今回は、学校図書館そのものよりも、教材センターとしての学校図書館がどれほど成立し得たかを中心に扱っていく。

本研究の位置づけ

- 戦後初期の学校図書館は、教材センターの役割を持ち得たのか？
 - 文部省, CIEの政策は反映されていたか？(政策)
 - 教育哲学や思想はどんな反映をしたか？(思想)
 - 学校教育の実践において教材センターの位置づけはどうなっていたか？(実践)
 - 当時, 親たちが求めていた教育はどのような物だったか？(社会状況)

本研究が解決すべき問題

- 学校教育の実践において教材センターの位置づけはようになっていたか？（実践）
 - 誰がどんな立場から行った実践なのか？
 - 実践のモデルは何か？
 - どんな記述が見られるのか？
 - どんな目的から教材センターは必要とされたのか？
 - その後の時代に実践は受け継がれていったのか？
 - 本研究は一般化可能なのか？

戦後初期の学校教育運動

- 戦後初期には学習指導要領の記述が曖昧であり、学習指導要領の活動を具象化する試みの中で、2つの教育運動が起こった。
 - 「コア・カリキュラム運動」(本研究の対象)
 - 師範学校の教員が中心となり、アメリカのヴァージニア・プログラムに影響を受けた。社会科など特定の活動を中心に教科を統合する運動。
 - 「地域教育計画」
 - 東京大学の教育学教員が主導、地域の実態調査から地域教育計画を策定し、地域状況を改善しようとする取り組みである。

調査方法・時代範囲

- 調査方法

- 各学校が公表，公刊していたカリキュラム実施案（プラン）について文献調査を行った。

- 時代範囲

- 1948年から1950年までを対象。
 - コア・カリキュラム運動の発生から民間情報教育局（CIE）のオズボーンの手紙によって運動が収束していくまでの時期
 - 今回扱う資料はこの範囲のもの。

発表の構成

(1) 研究の前提

(2) コア・カリキュラム運動の概要

(3) 各プランの教材センターへのつながり

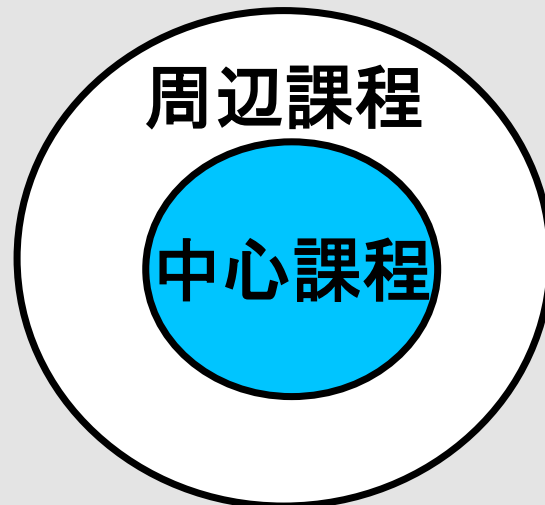
(4) 考察・今後の課題

2. コアカリキュラム運動の概要

- コア・カリキュラムとは
- コア・カリキュラム運動のモデル
- 『近代カリキュラム』によるヴァージニア・プログラムの概要

コア・カリキュラムとは

- 今回の対象としたプランは基本的に同心円構造
 - 中心課程…子どもの生活上の諸問題を解決するための単元学習からなる。(今回は社会科が中心)
 - 周辺課程…中心課程を支える性格。専門分化した体系的な知識・技術・芸術を含む。(算数・理科等)



コア・カリキュラム運動のモデル

- コア・カリキュラム運動がモデルとした理論はアメリカのヴァージニア州の教育改革である。
- ヴァージニア・プログラムは世界大恐慌後の経済と教育の復興政策が背景となっていた。
- 日本には、倉沢剛が『近代カリキュラム』において紹介し、「コア・カリキュラム」のモデルとして、コア・カリキュラム運動や社会科の学習指導要領(試案)に影響を与えていた。
- 以下、『近代カリキュラム』をもとに概要を示す。

ヴァージニア・プログラムの概要(1)

- 「社会適応」と「人格の統合」が目的
 - 民主的に行動しうる実践力を養うには教科ではなく、子供の成長にふさわしい実際的な生活の問題を、学習の出発点にすべきとした。
- 学習を社会的な問題を中心とする「一般の要求にこたえる学習」(中心学習)と「個人の要求に応える学習」(自由研究)に分けた。
 - あらゆる「問題」とあらゆる「活動」が入ってくるため教科の区別が無くなっており、この点がコア・カリキュラム運動で参考にされた。

ヴァージニア・プログラムの概要(2)

- 各学年に配置された「問題」を解決するために、様々な学習活動が設けられている。
- 学習問題を進めるためには、様々な技能が必要であり、そのための技能の能力表が6分類用意されている。
 - 芸術，健康と体育，家庭科，算数，理科，社会科と国語
 - このうち，社会科と国語の分類で「参考書を使う」，「図書館から適当な書物を選ぶ」，「カードの目録を用いる」などの能力が示されている。

ヴァージニア・プログラムの概要(3)

- 「話し合い」と教材センターの必要性

- ヴァージニア・プログラムは“問題解決ということに力をいれ、主として参考読物を多く与えて、それについて話し合わせる”ことが特徴だとされた。
- 近代社会科において「話し合い」には多様な資料が不可欠だとしていた。
- 一方、コア・カリキュラム運動の一般的な教授案では「話し合い」によって単元の導入を行っている。
- 倉沢の議論に従えば、コア・カリキュラム運動における単元の導入では、教材センターは必要とされていたといえる。

発表の構成

- (1) 研究の前提
- (2) コア・カリキュラム運動の概要
- (3) 各プランの教材センターへのつながり
- (4) 考察・今後の課題

3. コア・カリキュラム運動の実践例

- 今回は明石附小プランと桜田プランが対象
 - 明石附小プランは、運動団体であるコア・カリキュラム連盟の機関誌『カリキュラム』で、創刊当初から明石附小プランを対象とした記事が生まれ、全国から参観者を多く集めたモデルケースであった。
 - 桜田プランも同様に『カリキュラム』に掲載され、参観者を多く集め、同様にモデルケースとなっていた。
 - 両プランとも代表的な事例であり、この両プランを見ていくことでコア・カリキュラム運動全体での大枠がつかめると考えた。

3. コア・カリキュラム運動の実践例

- 明石附小プラン
 - 概要とカリキュラムの構造
 - 中心学習能力表
 - 教授案における記述
- 桜田プラン
 - 概要とカリキュラムの構造
 - 授業案における記述

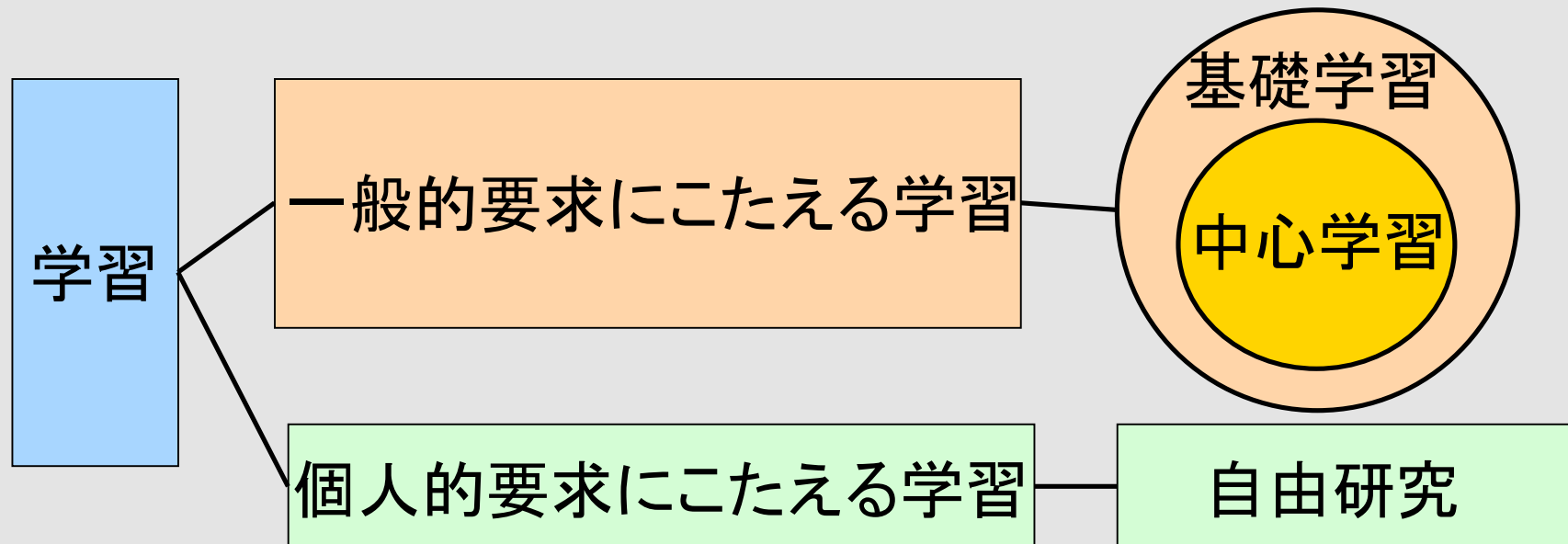
明石附小プランの概要

- 1947年2月から行われた兵庫師範女子部附属小学校によるプラン。
- 倉沢剛が大きく関与し、ヴァージニア・プログラムの翻訳と思われる表現が散見される。
- アメリカの教育思想に影響を受け、民主的社会のよき成員の形成を目指していた。

明石附小プランの カリキュラム構造

- 明石附小プランのカリキュラムの特徴

- 「一般的要求にこたえる学習」
「中心学習」, 「基礎学習」
- 「個人的要求にこたえる学習」
「自由研究」



中心学習能力表

- 「中心学習」で求められる能力を示した「中心学習能力表」における「言語」部分の記述
 - 「図書館から適当な書物を選ぶ」(1年生から)
 - 「書物から適当な部分を選んで用いる」(1年生から)
 - 「目次を利用する」(1年生から)
 - 「索引を利用する」(4年生から)
 - 「参考文献の表を用いる」(5年生から)
 - 「カードの目録を用いる」(5年生から)
- これらの指導は言語が関与している全ての場面で行っていったという。

教授案における記述

- 具体的な教授案では、学校図書館につながる活動が散見される。
 - 2年生の1月「秋の野山めぐりをしよう」
 - 基礎学習として、字引の引き方、本の調べ方を知るといった活動が示されている。
 - 4年生12月の「学級文庫を作ろう」
 - 単元の目標に、人間教養に於ける図書の占める重要な地位を理解し、図書選択の技能と利用態度の向上をはかる、と示されている。

3. コア・カリキュラム運動の実践例

- 明石附小プラン

- 概要とカリキュラムの構造
- 中心学習能力表
- 教授案における記述

- 桜田プラン

- 概要とカリキュラム構造
- 授業案における記述

要綱の訂正(二点)

- 3ページ目右側

誤: 今回取り上げる
『新しいカリキュラムの実践』
はこの第三次案が中心となっている。

正: 今回取り上げる
『**桜田カリキュラム: 実践と新指向**』
はこの第三次案**および第四次案**が中心となっている。

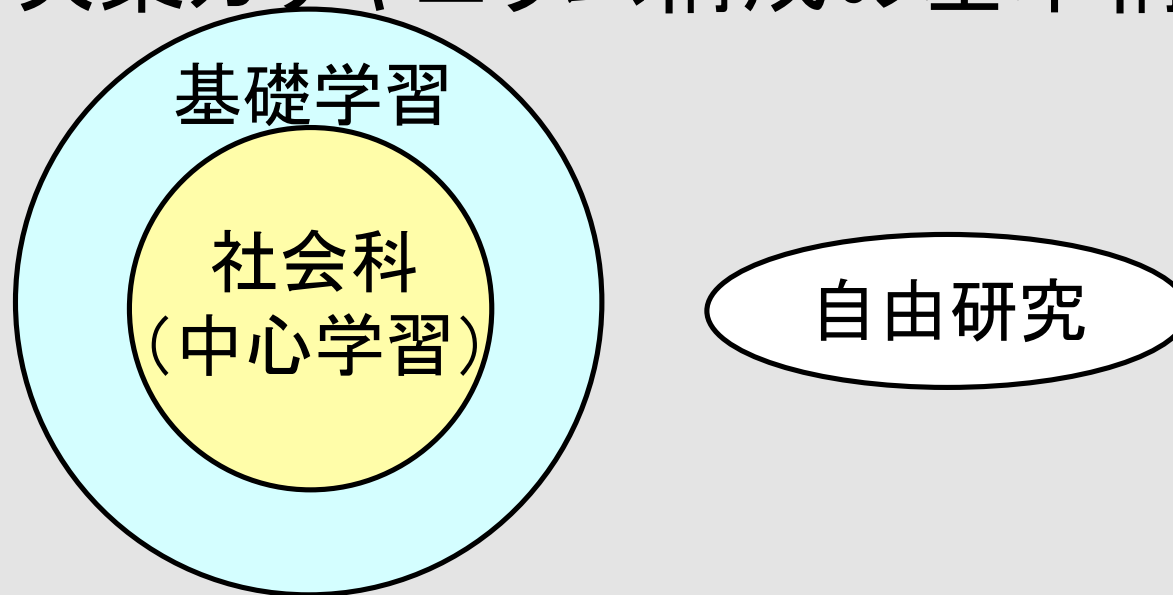
- 参考文献3)が対象となる文献。
- 第四次案も文献で中心となっている。

桜田プランの概要

- 東京都港区桜田小学校の1948年から1953年まで行われていた実践。
- 敗戦によって巻き起こった社会混乱に対し、子供たちを守るという発想から、東京都が募集した新教育の実験学校に応募したのが始まり。
- 文部省の協力を得て、学習指導要領の原案を借り受けながら、その分析を行なった上で、子どもを中心に据えた学習を行っていった。

桜田プランの カリキュラム構造

- 第3次案カリキュラム構成の基本構造



中心学習・・・社会生活上問題を解決する学習

基礎学習・・・中心学習の用具となる学習

教科の基礎的な能力となる教材の学習

自由研究・・・生徒自身に研究させる時間

授業案における記述

- 桜田小学校の第3次案の授業案では多くの資料を必要とする記述が見られる。
 - 3年生「私たちの郷土」「大昔の人々」という単元では本を読む、資料を収集するという活動が出てくる。
 - 6年生「工場」という単元でも、京浜工業地帯の発達を調べるために、図書によって調べてみるという活動が示されている。
 - 「話合」による導入は全学年、全ての単元で行われている。
 - 参考資料の必要性

発表の構成

(1) 研究の前提

(2) コア・カリキュラム運動の概要

(3) 各プランの教材センターへのつながり

(4) 考察・今後の課題

4. 考察

- 教材センターはコア・カリキュラム運動に必要とされていたか
- その後の時代に実践は受け継がれたのか
- 本研究は一般化可能か

教材センターはコア・カリキュラム 運動に必要とされていたか

- ヴァージニアプログラムと明石附小プランにおける言語能力表
 - 1年生から「書物から適当な部分を選んで用いる」という調べを前提とした能力を身につけさせている。学年に応じて調べ方を多様にする能力が示された。
- 教材センターを必要とする2つの活動
 - 単元の導入「話し合い」において
 - 単元をこなす上で必要な研究・調査活動において
- 学校全体での資料収集や管理の必要性はあったと思われる。

その後の時代に実践は 受け継がれたのか

- コア・カリキュラム運動に対する障害
 - 「はいまわる経験主義」として学力低下の懸念
 - CIEのオズボーンの書簡による批判
 - 教科カリキュラムの立場からの批判
- 中心的な教員の異動による中断
 - 運動は衰退，インパクトも以前ほどではなくなった。
 - 以後，社会科ではなく生活教育を中心に再構成されていく。

本研究の一般化可能性と類型化

- 学校教育の実践とは？実践は一般化可能か？
 - 今回示した教育運動は、全ての学校で行われていたわけではない。
 - しかし、1946年の学習指導要領（試案）は多様な教材を要求していた。拘束力はないが全ての学校に配布され、モデルとなっていた。今回の教育運動はその具象化の動きである。
 - その中でもコア・カリキュラム運動は代表的な教育運動であり、各学校の独立した動きではない。
 - 全ての学校の実践を一般化できないが、一般化につながる類型化の一つとしては提示できる。

本研究が解決すべき 問題に対して(1)

- 学校教育の実践において教材センターの位置づけはようになっていたか？(実践)
 - 誰がどんな立場から行った実践なのか？
 - 実践のモデルは何か？
 - どんな記述が見られるのか？
 - どんな目的から教材センターは必要とされたのか？
 - その後の時代に実践は受け継がれていったのか？
 - 本研究は一般化可能なのか？

本研究が解決すべき 問題に対して(2)

- 学校教育の実践において教材センターの位置づけはようになっていたか？(実践)
 - 誰がどんな立場から行った実践なのか？
→ 師範学校附属学校の現場の教員。
 - 実践のモデルは何か？
→ アメリカのヴァージニア・プログラム。
 - どんな記述が見られるのか？
→ 「中心学習能力表」における「索引の利用」など。
→ 授業案での「図書によって調べる」など。

本研究が解決すべき 問題に対して(3)

- 学校教育の実践において教材センターの位置づけはようになっていたか？(実践)
 - どんな目的から教材センターは必要とされたのか？
→ 調べを行うための場所として、多様な資料を収集し管理する目的から必要とされていた。
 - その後の時代に実践は受け継がれていったのか？
→ 運動の中断により受け継がれてはいない。
 - 本研究は一般化可能なのか？
→ 全ての学校活動を一般化できないが、類型化のひとつとしては提示可能である。

今後の課題

- 他プランや他の教育運動では、教材センターは
どう取り上げられているか。
- アメリカでは、ヴァージニア・プログラムにおいて、
教材センターとしての学校図書館は必要と
されていたか。
- 学校図書館関係者はこの動きをどう受け止めて
いたか。
 - 例えば、深川恒喜はコア・カリキュラムと学校図書館
を結びつけて、学校図書館の必要性を訴えている。
 - 他の関係者はどう考えていたか。

発表は以上です

最後までありがとうございました。